

ヴィゴツキー理論の発展とその時期区分について (Ⅲ)

神谷栄司

〔抄録〕

小論は30年代のヴィゴツキー理論の一つの方向を示す人格発達論を追跡しつつ、この理論と社会的実践との結節点を究明することを課題としている。ヴィゴツキーは人格を論じるとき、一方では狭義の人格概念(個性を捨象した人格)を用いて人格発達の普遍的法則を明らかにしようとした。他方では、ジョルジュ・ポリツェルの人間ドラマの具体心理学を摂取しつつ、ドラマ、心理システム、心的体験の諸概念によって具体的状況のなかにいる具体的個人、つまり個性をもった人格の概念に接近しようとした。小論は、人格発達の普遍的法則を含みつつ具体的個人の心理を具体的状況と統一する心的体験の概念こそヴィゴツキー理論と社会的実践との結節点に位置づけることを示している。

キーワード：ヴィゴツキー、人格、構造、ドラマ、心理システム、心的体験

メタ心理学はもう終わった、そして、心理学の歴史が始まる。
——ジョルジュ・ポリツェル『心理学の基礎への批判』

Ⅲ 人格構造と社会的実践をめぐって

1. キー概念

I (前々号)において、筆者はヴィゴツキー理論の発展を五つの時期に区分し、しかも30年代の三つの時期は同時平行的に存在しており、三つの路線とも言うべきものであることを述べておいた。筆者が提起する仮説は、30年代のヴィゴツキー理論の特色とは彼の理論のなかには三つの道が同時に走っていてまだ一本の大通りになっていない点にある。その道のひとつは『思考と言語』に結実した記号(とくに内言)による心理的ものの媒介理論であり、他の道は「年齢の問題」を機軸に誕生の危機から17歳の危機までの子ども時代を、幾つかの危機的年齢期と安定的年齢期の交替として具体的に描こうとした、当該の年齢期における中心的心理的新形成物による意識の構造理論(あるいは人格発達理論)であり、第3の道は心身の統一性あるいはスピノザ的な心身一元論を基礎とした人間の心理学の構想であった。

小論の課題は、上記の第2の道、意識の構造理論あるいは人格発達理論をより詳細に追跡することであり、さらに、それが保育、教育、福祉などの社会的実践とどのような結節点をもちうるのかについて考察することである。ヴィゴツキーにおける意識の構造理論あるいは人格発達理論はIでも素描しておいたが、その時点で筆者に欠落していた視点、すなわち、「心理システム」論⁽¹⁾と「狭義の人格」論、および、心的体験の概念がここではキー概念として考察の導きの糸となるであろう。分析すべき著作の流れは、『芸術心理学』（Выготский, Л. С., 1925/1987//1971//2006）, 「人間の具体心理学」（Выготский, Л. С., 1929/2003）, 「心理システムについて」（Выготский, Л. С., 1930/1982）, 『高次心理機能の発達史』（Выготский, Л. С., 1931/1983//2005）, 「子どもの発達の年齢的時期区分の問題」「年齢期の構造とダイナミズム」「年齢期の問題と発達診断」〔以後、以上を「年齢の問題」と表記する〕（Выготский, Л. С., 1933/2001//2002//2006）, 「子ども期における想像とその発達」（Выготский, Л. С., 1933/1982//1976//2000）, 『児童学原理』（Выготский, Л. С., 1935/2001）である。

2. 「心理システムについて」

この著作は、ロシア語版6巻本著作集の編者による註によれば、1930年10月に第1モスクワ大学神経症病院で行われた報告の速記録に加筆されたものである。報告の場が全ロシア規模の学会や会議ではないことにも関係していると考えられるが、ヴィゴツキーはこの著作のなかでそれまでの自己の研究の問題点やまだ完成していない新しい概念（心理システム）についてかなり率直に語っている。これは、まだはっきりと形を整えていないが新しい問題を自己に課して追究しようとする彼の思索過程の、20年代と30年代を画する過渡期的記念碑ともいべき著作であろう。まず、この著作の特質についてあげておきたい。

- (1) ヴィゴツキーのこれまでの研究の問題点が率直に指摘されている。個別的な心理機能を他の心理諸機能との関連のなかにおいてではなく、それ自体として分析してきたこと、つまり、本来は複雑な過程である機能の発達を単純化して考察してきたことを自己の問題点として明らかにしている。
- (2) その問題点と関連して、心理諸機能の関係・関連そのものを考察し、子ども・人間の発達のなかに位置づけようとしている。ヴィゴツキーはこの関係・連関を心理システムの概念を用いて解明しようとしているが、この概念はヴィゴツキー自身が認めるように、未完成である。
- (3) ヴィゴツキーは拙速な理論化を回避し、これまで自分が行ってきた実験や他の研究の再吟味を、機能や諸機能の関係・連関の発達と崩壊の観点から行っている。したがって、この著作では、乳児期の感覚-運動的過程から移行期（思春期）における概念形成などに至る発達の実験的諸事実の解釈と、失語症や統合失調症における心理システムの崩壊の病理学的事実の解釈が中心を占めている。おそらくそうであるのは、ゲー

テのことはをひきながら、あらゆる科学的研究は「問題を公準にしている。つまり、実験研究の過程で許容され検証されるべき仮説に先立って定式化されたものから出発している」(Выготский, Л. С., 1930/1982, c.109) と述べて、自戒および他の研究批判としているからであろう。

以上のような特徴をもつこの著作から、ここでは、ヴィゴツキーが規定した心理システムの定義を吟味しておきたい。ただこの著作が過渡期に位置するとすれば、ここでの心理システム概念がより後の成熟した定義や概念(狭義の人格概念や後の心理システム概念)にどのようにつながりうるかという視点が重要である。

上記(1)とかかわる点であるが、個別的心理機能の発達をそれ自体として考察しようとしていた20年代のヴィゴツキー研究について、「扱われている心理諸機能の個々の説明に介在する人格概念が見逃されていると、私たちは非難されてきた。これは実際にそうである。」(Выготский, Л. С., 1930/1982, c.109) とヴィゴツキー自身が述べているように、彼の問題関心は心理諸機能間の関係・連関、人格の問題を深めることに向かっている。もっともヴィゴツキーは理念的にはこれらの問題をすでに考察しつつあり、「心理システムについて」の前年に書かれたメモ書き「人間の具体心理学」には、「マルクスのパラフレーズ：人間の心理学的本質は、内へと転移され、人格の諸機能や人格構造の諸形態となった、社会的諸関係の総体である。マルクスは類としての人間について、ここでは個人について。」(Выготский, Л. С., 1929/2003, c.1023), 「人格は社会的諸関係の総体である。」(Выготский, Л. С., 1929/2003, c.1030) などの、媒介理論とかかわった人格の規定や後述する思考と情念の関係・連関が見いだされる⁽²⁾。だが、それらはまだ理念的なのであって、実験や観察などの事実による検証が求められているのであった。

ところで、ヴィゴツキーは心理システム概念を次のように定義している。

「その〔私の考えの〕基本的観念(それはきわめて簡単である)は次の点にある。すなわち、発達の過程、ことに行動の歴史的発達の過程において変化するのは、私たちが以前に研究したような(それは私たちの誤りであった)諸機能や、諸機能の構造や、諸機能の運動のシステムであるよりは、むしろ、変化し変形するのは諸機能相互の関係・連関であり、以前の段階では明らかでなかった新しいグループ化が発生する。それ故、ある段階から他の段階への移行にあたり本質的な違いとなるものは、しばしば機能内部の変化ではなく、諸機能間の変化、諸機能間の連関や諸機能間の構造の変化なのである。諸機能が相互に置かれている新しい可動的な関係の発生を心理システムと呼ぶことにするが、通常は残念ながらこのあまりにも広い概念に含みこまれているすべての内容をここに含みこむことにしたい。」(Выготский, Л. С., 1930/1982, c.110)

ヴィゴツキー自身が認めているように、この定義は「あまりにも広い概念」だということができる。彼は一方では、「これらの機能〔個別的心理機能〕への独特な関係のなかにあると発生的に仮定される人格と、私たちの説明のなかで提起された相対的に単純なメカニズムとのあ

「いだのブランク」(Выготский, Л. С., 1930/1982, c.110) を埋めるものとして、つまり、人格と個別的な心理機能のあいだのブランクを埋めるものとして心理システム概念を用い、他方では、「心理システムの形成は人格発達と一致する」(Выготский, Л. С., 1930/1982, c.131) というレヴィンの規定に同意していることに見られるように、人格とはほぼ同義のものとして心理システム概念を用いている。

上記のヴィゴツキーの定義についていえば、「ある段階から他の段階への移行にあたり本質的な違いとなるものは、しばしば機能内部の変化ではなく、諸機能間の変化、諸機能間の連関や諸機能間の構造の変化なのである」という部分の段階を年齢期または発達段階と捉えた場合には、「諸機能間の連関」「諸機能間の構造」や「新しいグループ化」は後のヴィゴツキーであれば人格に相当することになる。

しかし、ヴィゴツキーが具体的に考察している諸機能間の連関の多くは、人格そのものではなく、人格内部に位置している。たとえば、感覚・運動的統一性、知覚とことばの総合、記憶と思考の融合物、思考と感情の関係などがそれである。だが、人格の内部において、諸機能間の連関としての心理システムにおいて諸機能のヒエラルヒーが変化するという後の心理システム概念はまだ登場していない。いずれにせよ「あまりにも広い概念」であった心理システム概念には後の人格概念と新しい心理システム概念が未分化なまま含まれていると考えてよいであろう。

3. 想像, 思考, 情動の心理システム

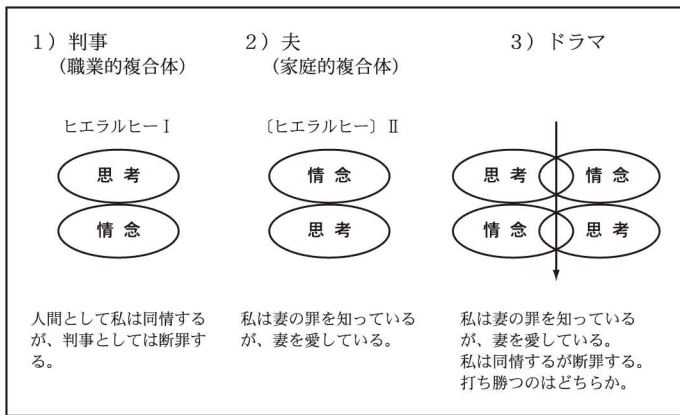
心理システムという発想の前駆となるものは『芸術心理学』であろう。「芸術心理学は理論的心理学の二つあるいは三つの領域とかかわっている。あらゆる芸術理論は、知覚に関する学説、感情に関する学説、想像または空想に関する学説のなかで確立された観点到に依存している」(Выготский, Л. С., 1925/1987, c.186//1971, p.277//2006, p.264) というヴィゴツキーのことばは、芸術によってひき起こされる心の動きは、知覚、感情、空想のシステムとして理解できることを示している。とくにヴィゴツキーは芸術的感情は空想との関連を欠いては理解できないと考えている。

「情動の身体内の現れと外的現れのそうした停滞と弱化は、情動におけるエネルギーの一極的消費という一般法則の部分的事例と見なされるべきだと思われる。この法則の本質は、情動におけるエネルギー消費は二つの極の一つ一掃消部あるいは中枢部で行われ、一方の極での活動の強化は他方の極での活動の弱化を急速にもたらすことに帰着する。

私たちのなかに著しく強力な感情をひき起こすかに見えるが、それと同時に、そうした感情はいずれにも表現されることのない芸術も、まさしくこの観点から考察しようと思う。芸術的感情と普通の感情とのこの謎めいた違いは次のように理解しなければならないと思われる。すなわち、芸術的感情は〔普通の感情と〕同じ感情であるが、著しく強化された空想の活動によって自由となる感情である。」(Выготский, Л. С., 1925/1987, c.200-201//1971, pp.295-296//2006, p.281)

この引用の前段にある「情動におけるエネルギーの一極的消費」の法則は、晩年の『情動に関する学説』の心身の統一性のテーゼからすると肯定しがたいものがあるが、ここでは、芸術的反応は空想と感情との不可分の関連によって成り立つという点が心理システムの前駆として位置づきうることを指摘しておきたい。

諸機能間のヒエラルヒーが変化するという意味での心理システムが最初に登場するのは「人間の具体心理学」においてであろう。この著作の後半には、心理システムという概念は使われていないが、後のこの概念に近い内容が記されている。ヴィゴツキーはスピノザとフロイトにおける思考と情念の対照的な関係を示しつつ、次のような図式を描いている (Выготский, Л. С., 1929/2003, c.1032)。



ヒエラルヒー I はスピノザについての図式 (情念の主人としての思考) であり、ヒエラルヒー II はフロイトについての図式 (情念の下僕としての思考) であり、その二つのヒエラルヒーの衝突のなかに生活におけるドラマがある。フランスの哲学者ポリツェルから摂取しようとした具体心理学やドラマの概念については後述することになるが、ここで強調しておきたいのは、「諸機能の恒常的で固定したヒエラルヒーは存在しない」(Выготский, Л. С., 1929/2003, c.1031) という視点から上の図式が描かれていることである。ヴィゴツキーはこの思考と情念の関係を「構造」としているが、むしろ後の心理システムの特徴を表している。思考から情念へという運動と情念から思考へという運動の双方が人間には存在し、そのようにヒエラルヒーが変化したり衝突したりすることが人間の具体的な姿であることを言っているのである。

上記の図式は手稿の形で、ひとつのメモとして書かれているが、ヒエラルヒー I, II をより一般化した論述が「子ども期における想像とその発達」のなかに見られる。まずヒエラルヒー II と関連する点であるが、ヴィゴツキーは自閉的思考の精神病理学的研究に依拠しつつ、「自閉的な思考の歩みによって空想的に構成された想像的形象が情動過程の発達における重要なモメントである」ことは否定できないとし、ノーマルな発達を遂げている子どもや大人の場合に

も、「独特な形態の思考活動」、すなわち、「情動的興味に従属する」思考活動が存在すると考えている。この「情念の下僕」であるかのような思考活動は「夢想的形態の想像」のなかに見られる。そうした思考が実現される事情のひとつとして、「一連の情動的興味・意欲がこの場合、情動過程の現実的な満足の代理をする見かけ上の虚構的満足を得る」ことがあげられており（Выготский, Л. С., 1933/1982, с. 450//1976, pp. 207-208//2000, pp. 144-145）、幼児後期に特徴的な「虚構場面をとまなう遊び」（ごっこ遊びなど）における子どもの思考もそうしたものであるろう。

この著作では、ヒエラルヒー I に関連する点となるが、現実的思考から情動への運動も強調されている。ヴィゴツキーは、たとえば現実的思考を駆使して複雑な政治状況を分析するとき革命家が抱く情動のように、「現実的思考は、それが何らかの形で人格の中心に根ざしたその人にとって重要な課題と結びついているとき、想像や夢よりもはるかに肝要で真性の性格をもつ一連の情動的心的体験をよび起し、ひき起こす」（Выготский, Л. С., 1933/1982, с. 451//1976, pp. 208-209//2000, p. 146）と述べている。現実的思考は想像・夢よりも肝要で真性の情動を生み出す点に注目しておきたい。もちろん、現実的思考にも想像の要素が含まれていないわけではない。革命家が現実的思考を押し進めるとき、ある政治状況のなかで《A という行動をとれば状況はこうなり、B という行動をとればあなる》と想像が作用することは必然であり、現実的思考にも思考、想像、情動の三つの機能が認めらると考えてよいであろう。

ヴィゴツキーはさらに発明家の想像にも言及している。「彼が実現しなければならない設計図やプランを想像のなかに構築する発明家は、情動の主観的論理にもとづいて思考のなかで運動する人とは似ていない」（Выготский, Л. С., 1933/1982, с. 451//1976, p. 209//2000, p. 146）。この発明家の想像は、夢想的形態の想像とも革命家の現実的思考に含まれる想像的モメントとも異なるものであろう。

こうして、自閉的思考と現実的思考、夢想家と革命家と発明家の心理における諸機能—思考、想像、情動—はそれぞれに独特な関係のなかに配置されることになる。やや図式的に言えば、夢想家、革命家、発明家のもつ心理的諸機能のヒエラルヒーはそれぞれ《想像—情動—思考》、《思考—想像—情動》、《想像—思考—情動》ということになるであろう。

いま分析している著作では、ヴィゴツキーはこのように変動するヒエラルヒーをもった諸機能の連関を心理システムと名づけている。前述の著作「心理システムについて」とは異なり、ここでは段階の移行との関連づけは見られない。ここでの心理システムの定義について、ヴィゴツキーは次のように述べている。

「私たちが諸機能とよび慣れてきた諸過程の範囲を超える複雑な形態の活動にとって、その活動の複雑な機能的構成を考慮すれば、**心理システム**という名称を用いることが正しいであろう。このシステムにとって特徴的であるのは、システムの内部で支配する諸機能間の連関と関係である。」（Выготский, Л. С., 1933/1982, с. 451//1976, p. 209//2000, p. 147）

このように、ここでは個別的な心理機能を超える（あるいはいくつかの諸機能が組み合わされた）複雑な形態の活動が心理システムとよばれており、そのシステム内のヒエラルヒーの変化は同一の発達段階において生じうると考えよいであろう。人間は同時に夢想家であり、革命家であり、発明家たりうるからであり、それらは段階を構成するよりは人間の多面性を表しているからである。

それとともに解明を要することは、次にとりあげる人格の構造と心理システムはどのような関係にあるのか、という問題である。明らかなことは、心理システムは人格の構造の内部に存在すること、したがって、全体としての人格にたいして心理システムはその部分であることである。だが、人格の具体的な形態である、ある年齢期の中心的機能と副次的機能、さらに発達の社会的状況という人格発達のダイナミズムのなかに心理システムがどう位置づくかについては、ヴィゴツキーは明示していない。心理システムの内部では諸機能のヒエラルヒーが変動的であることは明らかであるが、そうした変動するシステムが全体としての構造をどのように変更しうるのは、人格の構造をさらに深めていく課題のひとつであろう。

4. 狭義の人格概念と年齢期

ヴィゴツキーが人格の概念を明確に規定しはじめたのは『高次心理機能の発達史』最終章においてであろう。ここでヴィゴツキーは個別機能の文化的発達ではなく、全体的な文化的発達を描くために、人格と世界観という二つの概念を導入している。ここでの世界観とは世界に対する論理的・体系的な見解という意味ではなく、人格が主観的側面を担うのに対応して、外界等への子どもの文化的関係を表す概念として用いられている。しかし、いま問題として論じているのは人格についてであるので、世界観の方は省略しておきたい。

まずヴィゴツキーは、この最終章で用いられている人格の概念とは通常の意味での人格よりも狭い意味である旨を述べている。どの点が狭いかというと、通常は人格の概念に含まれている個性のあらゆる指標を捨象するという点であった。したがって、そうした狭義の人格概念は文化的発達と等しくなり、文化的発達の結果として人格が生じることとなり、人格は社会的概念あるいは歴史的概念であることになる。そうした狭義の人格概念についてヴィゴツキーは次のように述べている。

「こうした理解に立つと、人格は通常に用いられているよりも狭い意味をもつことになる。私たちは、個性を構成したり、あれこれの一定のタイプに個性を関係づけたりする、個性のあらゆる指標をここでは数えあげないでおく。私たちは子どもの人格と文化的発達とのあいだに等号を置きたいと思う。こうして人格は社会的概念であり、人間における超自然的なもの、歴史的なものを含んでいる。それは生得的なものではなく、文化的発達の結果として発生するのであり、したがって、『人格』は歴史的概念である。」(Выготский, Л. С., 1931/1983, c. 315//2005, p. 376)

ヴィゴツキーがここで、敢えて個性を捨象した狭義の人格概念を用いようとしたのは、まずは人格発達の普遍的法則性を探求しようとしたためであったと思われる。もちろん、ヴィゴツキーは個性を無視したわけではなく、彼が人間ドラマの心理学や実践的な問題を論じるときには個性にあふれた人格が顔を出してくるのである。狭義の人格発達は全体的な文化的発達とイコールであるとヴィゴツキーは述べているが、『高次心理機能の発達史』最終章の後半の叙述一年齢期の発達の素描一からみて、また「年齢の問題」に照らしてみると⁽³⁾、筆者はむしろ狭義の人格とは年齢期とイコールではないかと考えている。

「年齢の問題」のなかには、アリストテレスが述べるような全体と部分の関係を意識しながら⁽⁴⁾、年齢期も人格もともに構造や全体として規定している次のような箇所があり、狭義の人格概念と年齢期の概念は、ヴィゴツキーの場合、仮にイコールではないにせよ、少なくともきわめて近接したものであったと思われる。

「年齢期とは、発達の部分的路線の各々の役割や比重を規定するような全体的でダイナミックな形成物であり、構造である。どの任意の年齢時代でも、子どもの人格の個別的側面ないし部分が変化し、その結果、全体としての人格の再編成が生じるというようには、発達は実現されない。発達のなかにはまさしく逆の依存関係が存在するのであって、それは、子どもの人格はその内的構成において全体として変化し、この全体的なものの変化の法則によって人格の各部分が規定される、という点にある。」
(Выготский, Л. С., 1933/2001, с. // 2002, р. 28 // 2006, р. 68)

狭義の人格概念は年齢期の概念に合致するとすれば、次に紹介し分析する年齢期の構造や発達をめぐる問題はほぼそのまま人格の構造や発達について語られていると考えてよいであろう。

5. 人格構造としての年齢期の構造

(1) ヴィゴツキーのいう年齢期 возраст とは一般的な意味での発達段階を意味している。この問題でまず重要であるのは、いかなる指標によって発達の時期区分をおこなうのかである。ヴィゴツキーはこの時期区分に関する当時の代表的な三つの見解を批判的に吟味することからは始めている。その三つとは以下のものである。

① 子どもの発達と関連するとはいえ発達の外部にあるものの段階を基準にする見解。それは、個体発生は系統発生を繰り返すという系統発生反復説に典型的に現れている。そこでは個体発生の内部のものではなく個体発生と区別される系統発生のなかに指標が探求されている。また、教育制度を基準にした区分も同様の問題点をもっている。教育はたしかに発達に大きな影響を与えているが、教育と発達は同一ではないので、教育の区分はそのまま発達そのものの区分であるとはいえない。ここでも発達の外部に時期区分の指標が求められているのである。

② 発達の内部にある要素や側面を基準にはしているが、ひとつの指標を基準に発達を区分する見解。ヴィゴツキーがここで例示しているのは、ラングシュテインとブロンスキーによる歯の発達（歯のない段階、乳歯の段階、永久歯の段階）の指標、シュトラッツによる性的発達の指標（授乳期、中性または

無性期, 両性期, 性的成熟期), シュテルンによる心理的基準の指標 (遊び活動のみを行う時期, 遊びと労働の分化にともなう意識的学習の時期, 青年としての成熟期) などである。これらの見解はある指標のもつ意味や価値は発達の時期が異なれば別の意味や価値をもつようになることを見ていない。(ひとつの指標という点では, ヴィゴツキーがこの論文を書いた時期にはまだピアジェは本格的な発達段階論を展開していないが, 後に彼が描いた知的操作を指標にした発達段階論もこの分類に入るであろう。また, 田中昌人の可逆操作を指標にした発達段階論も同様であると思われる)。

③ 発達の本質的特徴にもとづく時期区分に移行しつつある見解。ヴィゴツキーがここで例示しているのは, ゲゼル (発達の内的なリズム・テンポによる区分), クロー (発達, 教育, 学習の相互関係による区分), ビューラー (発達の各時期における新しいものによる区分) であるが, 発達を量的変化とみる観点 (ゲゼル), 進化論的観点 (クロー), 経験的観点 (ビューラー) のために, 発達の科学的な時期区分には至っていないとされている。(Выготский, Л. С., 1933/2001, c. 159-168//2002, pp. 12-16//2006, pp. 57-61)

ヴィゴツキーは, この三つの見解への批判的吟味をもとに, 自己の時期区分論を構築しようとしている。そうした批判的吟味から, 時期区分の基準は発達の外部ではなく内部に求めるべきことや, その指標はひとつではないことや, 発達を量的変化と捉えるのではなく質的变化と捉えることや, その発達の時期, 年齢期にはじめて子どものなかに生じる新しいものに注目することなどが引き出されている。とくに③の諸見解が新しい土台のなかに置かれて改造されているように思われる。

ここでヴィゴツキーが結論づけている時期区分の基準とは, その年齢期にはじめて発生する新形成物 (新心理機能) で, しかも, 他の心理諸機能を規定するような中心的な新形成物である。彼は次のように書いている。

「……子どもの発達の具体的な時代または年齢期を規定するための基準は, 子どもの発達における新しい時代または新しい段階としての各年齢期の本質そのものを特徴づける**新形成物**のほかにはないし, ありえない。年齢的**新形成物**として理解すべきものは, ある段階ではじめて発生し, 環境への関係における子どもの意識, 彼の内的生活と外的生活, その時期における彼の発達のすべての歩みをもっとも主要で基本的な点で規定するような, 人格とその活動の新しいタイプの構造, 身体的・社会的変化である。」(Выготский, Л. С., 1933/2001, c. 169//2002, p. 17//2006, p. 61)

(2) 4でのヴィゴツキーの引用からも明らかであるが, ヴィゴツキーは年齢期を構造として把握している。また上記引用文中の「環境への関係」ということは年齢期の発達を理解するための原理として構造とならば重要性をもった「発達の社会的状況」の問題につながっている。

ところで, 構造とは一般に, それを構成している諸要素が足し算された総和でも, 諸要素が無秩序に存在するカオスのようなものでもない。ヴィゴツキーの場合, 構造を構成する諸要素のうちには中心的要素が存在し, それが他の副次的要素を規定しながら構造を全体として規定

すると考えられている。ここでの構造は年齢期または人格を意味するので、諸要素とは個別的心理機能のことである。上記の新形成物は、その年齢期にはじめて発生する心理機能ということになり、その発達が中心的発達路線をつくりだし、それに規定された他の心理諸機能は副次的発達路線を構成するのである（Выготский, Л. С., 1933/ 2001, с. 186 - 187// 2002, pp. 27 - 29// 2006, p. 68）。こうした構造と切り離して心理機能を抽出し、その機能の発達を研究することは機能主義とよばれるべきで、20年代にヴィゴツキーが行ったのはそのような研究であった。ヴィゴツキーの発達研究が機能主義的傾向を脱して、ここでより全体的に発達を考察する年齢期または人格の発達研究へと質的な飛躍を遂げていることは明らかである。

やや図式的になるが、ヴィゴツキーは各年齢期の構造の中心にある心理機能を次のように捉えている——「心理の誕生」（新生児期）、「大人との一体化された心理状態」（乳児期）、「知覚」（幼児前期）、「記憶」（就学前期）、「思考」（学齢期）。

（3）年齢期あるいは人格を構造として捉えるべきこと、その構造のそれぞれに中心的新形成物としての心理機能があり、それが他の諸機能を規定していることを述べてきた。これは人格構造内部の運動であった。それとともに、子どもの発達においてある構造が他の構造に移行する運動について解明しなければ、まだ発達を十分に捉えたことにはならない。たとえば、幼児前期に知覚が占める中心的位置を、就学前期には記憶が占めるようになるということは、たんなる交替ではなく、もっと複雑な移行的過程をとまなっている。ヴィゴツキーは3歳の危機のような危機的年齢期こそ、ある構造の他の構造への移行に位置するものであると捉えるのである。

ある構造から他の構造への移行を説明するうえでは、ブロンスキーの見解を受け入れながらヴィゴツキーが整理する、次のような危機による発達の時期に関する概念は重要であろう。

「危機によって相互に切り離される子どもの生活の時間的経過を時代 эпоха〔エポック〕と段階 стадия〔ステージ〕——より激しい危機によるもの（エポック）とより小さな危機によるもの（ステージ）——と名づけることにしよう。また、相互に穏やかに区分される子どもの生活の時間的経過を相 фаза〔フェイズ〕と名づけることにしよう（ブロンスキー）。」（Выготский, Л. С., 1933/ 2001, с. 170// 2002, p. 18// 2006, p. 62）

ここでいわれる時代〔エポック〕はヴィゴツキーのいう年齢期に相当すると考えてよいであろう。年齢期そのものは激しい危機によって、年齢期内部は小さな危機または没危機によって区分されることになる。

ヴィゴツキーは激しい二つの危機にはさまれた時期を「安定的年齢期」とよんでいる。彼はそうした安定的年齢期の始まりをその時期の中心的新形成物の発生にもとめつつ、そうした年齢期は「子どもの人格の穏やかで、流れるような、しばしば気づかれない内的変化が優勢であり、その内的変化は目立たない『分子的』運動の蓄積によって実現されている」（Выготский,

Л. С., 1933/2001, c.170//2002, p.18//2006, p.62) と規定するのである。この「しばしば気づかれない内的変化」は安定的年齢期の始めと終わりとは子どもの人格の様相を大きく変化させていく。安定的年齢期の新形成物は他の副次的機能を規定するだけでなく、それ自身をも発達させていくことになる。そうした内的変化の蓄積とその結果を考慮してのことだと思われるが、ヴィゴツキーによれば、安定的年齢期は「小さな危機」によって区分される二つの段階〔ステージ〕によって構成されている (Выготский, Л. С., 1933/2001, c.182//2002, p.26//2006, p.66)。

子どもの発達過程には、上記の安定的年齢期と正反対の性格をもつかのような危機的年齢期が存在する。危機的年齢期とは二つの年齢期〔エポック〕を分かち激しい危機を意味し、ヴィゴツキーはそれを偶然的で一過的なものではなく、発達のなかに確固とした位置を占める一種の年齢期であると特徴づけている。この危機的年齢期の特徴は子どもの人格が全体として再編成されることにあるが、ヴィゴツキーはそれを次のように、社会の歴史における「革命」に比すべきものとしている。

「この時期に、数か月、1年、もっとも長くて2年という相対的に短い時間のあいだに、子どもの人格には先鋭で大規模な変動と転位、変化と急転が集中している。子どもは、私たちにはわずかでしかない期間に、その人格の基本的特色において、全体としてすっかり変わっている。発達の流れは、嵐のように急激な、ときとして破局的な性格をおびる。子どもの人格のあらゆる内的側面や、周囲の環境と彼との相互関係のあらゆるシステムの、根本的で基礎からの再編成が、短い期間のうちにひき起こされる。この時期の発達は、生じている変化のテンポや実現されつつある転換の意味からいって、諸事件の進化的進展よりは、むしろ革命的進展に似ている。これは、急転と移行の年齢期であり、子どもの発達の歴史における転換点である。発達の流れは激しい危機的な形態をとることになる。」(Выготский, Л. С., 1933/2001, c.171-172//2002, p.19//2006, p.62)

危機的年齢期にはそれ以前に達成されてきたものの破壊や退行などネガティブな様相が目立つようになる。たとえば、3歳の子どもは何事につけ「自分でする」を連発し、親と衝突している。弟か妹が生まれれば、ゆりかごを占領しようとする。「赤ちゃんがえり」という退行現象も見られる。そこから3歳の危機といえ、ネガティブなもののみが想起されるのである。しかし、ヴィゴツキーがいうように、「この〔危機的〕年齢期における発達のネガティブな内容はあらゆる危機的年齢期の主要で基本的な意味を構成する人格のポジティブな変化の裏面、つまり陰の面なのである」(Выготский, Л. С., 1933/2001, c.178//2002, p.24//2006, p.65) とすれば、ネガティブに見えるものの背後にポジティブなものを探りださねばならないであろう。まわりの大人とぶつかり泣き叫びながら「自分で」しようとする3歳の子ども、また大人が「しなさい」といったという理由で自分が本当はしたいと思っていてもそれをしないという3歳の子どもには、「聞き分けのなさ」というネガティブな現象の背後に、きわめて独特な形態ではあるが、自我の意識化の最初の姿というポジティブな面が隠されているのである。

危機的年齢期も一種の年齢期にはかならないので、ここでも中心的な新形成物の発生を特徴としている。この新形成物は安定的年齢期のものとは違って、そのままの形で次の年齢期に引き継がれないが、ヴィゴツキーによれば、隠されていたポジティブな側面は形を変えて次の安定的年齢期のなかに潜在していくのである（Выготский, Л. С., 1933, c. 180-181/2001, c. 182//2002, p. 25//2006, p. 66）。

なおヴィゴツキーは、安定的年齢期とは違って危機の始まりと終わりは確定しにくい、危機のクライマックスはよく把握でき、危機はそのクライマックスからおおよそ半年前には始まり、半年後に終了すると考え、危機的年齢期を三つの相（前危機相・危機相・後危機相）に区分している（Выготский, Л. С., 1933/2001, c. 182//2002, p. 25-26//2006, p. 66）。やや図式的となるが、ヴィゴツキーの指摘する危機は、誕生、1歳、3歳、7歳、13歳、17歳の危機である。

こうしてヴィゴツキーの発達理論では、新形成物を中心にした年齢期の構造化（安定的年齢期）と危機による新しい構造の産出とを絡み合わせて発達が捉えられているが、重要なことは、発達は子どもの内部だけで進行していくのではないことである。すでにヴィゴツキーからの引用からも明らかのように、環境との関係がさらにひとつの重要なモメントとなる。ヴィゴツキーは「発達の社会的状況」をそうしたもうひとつのモメントとして発達を説明している。

（4）子どもは他者のいない孤島のなかで発達しているのではなく、他者との多様な関係に満ちあふれた社会的環境のなかで発達していることは自明の事柄であろう。「人間は環境の産物」ということばがあるが、人間の場合、動物とは違って、環境によって一方的に規定されるわけではなく、子どもの発達の時期によって環境の意味も変化していく。同じ環境といっても、乳児期の子どもと3歳の危機のなかにある子どもとでは、彼らを取りまく社会的環境の本質も様相も彼らにとって異なってくる。ここでは環境にたいする発達の見方が重要になり、それをヴィゴツキーは「発達の社会的状況」という概念で表そうとしている。彼は次のように環境や発達の社会的状況について述べている。

「環境を子どもにたいして外的なものとなしたり、発達の舞台装置となしたり、子どもには無関係に存在し、その存在という要因そのものによって彼に影響を与えるような客観的諸条件の総体となしたりする、子どもの発達における環境の役割の理解は、正しくない。動物種の進化に即して生物学のなかで形成された環境の理解を児童学のなか、子どもの発達に関する学説のなかに移転させてはならない。各年齢期の始まりまでに、まったく独特で、その年齢期に特有な、もっぱら唯一無二といえる、子どもと環境との関係が形成されることを認めねばならないし、私たちはそうした関係をその年齢期における発達の社会的状況とよびたい。その年齢期の発達の社会的状況とは、その時期のあいだの発達のなかで生じるあらゆるダイナミックな変化の出発点である。子どもが発達の基本的源泉である環境から人格のますます新しい性質を汲み取ることでそれを獲得する形態と道筋、社会的なものが個人的なものになっていく道筋を、発達の社会的状況は規定するのである。」（Выготский, Л. С., 1933/2001, c. 188-189//2002, p. 30//2006, p. 69）

ここで着目しておきたいのは、環境を子どもにとって「外的なもの」と捉えるべきではないという点と、発達の社会的状況は当該の年齢期にとって特有なものであり、年齢期が異なれば発達の社会的状況も異なるものになるという点である。環境が子どもにとって外的なものではないとは、環境は子どもによって（より正確には、子どもに促されたり余儀なくされたりした大人によって）変更されうるものであることを含意しているように思われる。また、発達の社会的状況はそれぞれの年齢期に特有なものであるという点については、より具体的には子どもと大人のあいだのコミュニケーション様式の年齢的独自性を意味すると考えられる⁽⁵⁾。

この発達の社会的状況は安定的年齢期の第1段階、第2段階、危機的年齢期の各々において異なる役割をはたしている。

- ① 上記のヴィゴツキーからの引用のなかには、発達の社会的状況から子どもの人格の新しい性質が汲み取られ、社会的なものが個人的なものになっていくと述べられている。これは心理間機能の心理内機能への「内化」と呼んでもよいであろう。ヴィゴツキーはさらに端的に、ある発達の社会的状況がその時期の中心的新形成物をいかに生み出していくのかを究明しなければならないと述べており、発達の社会的状況から中心的新形成物へという運動は、おそらく安定的年齢期の第1段階に生じるものであろう。
- ② それと同時に、ヴィゴツキーは逆向きの運動も存在すると規定している。つまり、中心的新形成物が新しい発達の社会的状況を生み出すという運動である。安定的年齢期は中心的新形成物の発生によってはじまるが、その新形成物は第2段階においてははっきりと姿を現し、その時期の年齢期または人格の構造を確立していく。ヴィゴツキーはその過程は同時に発達の社会的状況を変化させていく過程でもあると捉えている。
- ③ ちょうどそれは危機の前夜ともいうべきものである。安定的年齢期の終わりに登場する中心的新形成物の確立とそれともなう新しい人格構造は、それまでの発達の社会的状況（それは変化しつつあったのだが）と矛盾するようになる。危機的年齢期、とくに危機のクライマックスとはまさしくそうした矛盾の爆発であり、それまでの発達の社会的状況を廃棄し、新しい社会的状況が創出されることになる。こうして危機的年齢期は子ども的人格のみならず発達の社会的状況をも「革命的」に変更していく。それは、子ども自身が（それに余儀なくされた大人が）再編されつつある人格構造に応じて環境を変えるという意味で、心理内機能の心理間機能への「外化」と呼んでもよいであろう。

このように、子どもの発達過程の安定的年齢期の二つの段階と危機的年齢期にそって、発達の社会的状況自体も変化し発達していくのであり、それは人格の構造、危機による人格の再編成とならぶ、発達のもう一つのモメントなのである（см. на Выготский, Л. С., 1933/2001, с. 188-190// 2002, pp. 30-32// 2006, pp. 69-70）。

6 個性をもった人格——ヴィゴツキー理論と社会的実践との結節点

以上に述べてきた年齢期の構造、構造の移行、発達の社会的状況をめぐる問題は狭義の人格にかかわる問題であった。上述したように、狭義の人格は通常的人格概念から個性を捨象したものであった。それは人格の普遍的発達法則を定立するという意味では必要な手続きであったように思われる。だが、個性をもった人格こそ生きた子ども・人間の人格なのであり、個性的人格の概念こそ、ヴィゴツキー理論を保育、教育、ソーシャル・ワーク、ケアなどの社会的実践と切り結ばせる結節点ではないかと考えられる。なぜなら、社会的実践は、社会的カテゴリーの人間ではなく、《このまたはあの》子ども・人間を客体かつ主体として営まれるからである。

ヴィゴツキーが狭義の人格概念のみならず個性をもった人格の概念にもっとも接近したのは、具体心理学における人間ドラマ、心理システム、さらに心的体験 переживание の諸概念においてではないかと筆者は仮説的に考えている。

（１）「人間の具体心理学」については稿をあらためて論じなければならないと考えるが、ヴィゴツキーがこの著作のなかで言及し、さらに摂取さえしようとしたジョルジュ・ポリツェルの具体心理学、人間ドラマの心理学は、ヴィゴツキーをして個性をもった人格概念にアプローチさせるモメントとなり、その後の一つの流れを方向づけるものであろう。

ポリツェルの心理学（Politzer, G., 1928/2003//2002）は、抽象心理学またはメタ心理学に対置される具体心理学であり、3人称の心理学に対置される1人称の心理学である。彼には、その時代の心理学はフロイトの精神分析をのぞいて、抽象心理学、メタ心理学、3人称の心理学と映じている。それらは具体的個人の心理を明らかにすることを放棄した心理学的実在論 réalisme psychologique であるというのである。ここでいわれる心理学的実在論とはたとえば個人の思考とは別に、あるいは、それに先立って、思考一般という普遍的なものが存在するという意味であろう。ポリツェルは、フロイトの精神分析は同一化やエディプス・コンプレックスなどの説明原理によって具体的人間のドラマを明らかにするなど、具体心理学の方向性もっているとするが、ポリツェル自身はフロイト主義者ではない。精神分析は彼にとって具体心理学と抽象心理学の二元性に引き裂かれているからである。具体的個人の間ドラマそのものが心理学の唯一の研究対象とされるのであり、心理学諸理論のうち、そこから逸れていくものは排除され、それに関連したものは摂取されていく。彼はワトソンの行動主義、ゲシュタルト心理学のなかにも人間ドラマを解明するモメントがあることを示唆している。

こうして、ポリツェルの具体心理学を折衷主義と特徴づけることは容易であろう。しかし、彼が具体的個人の心理を明らかにすることを問題にし、それをドラマの概念によって解明しようとしたことそのものは、きわめて貴重である。人間ドラマはヴィゴツキー的にいえば具体的個人を分析する単位である。ところで、ポリツェルのいうドラマとは何であろうか。

「心理学は、それに存在理由があるとすれば、『経験的』科学としてしか存在することはできない。したがって心理学は、1人称と等質性とを要請を、その次元に適合するように解釈しなければならない。経験的であるからには、心理学の〔対象とする〕私は特定の個人でしかありえない。他方では、この私は統覚のような先験的な行為の主体ではありえない。なぜなら、具体的個人と同じ次元にあり、ただたんに心理学の私の行為である概念が必要だからである。ところで、具体的個人の行為とは生活であるが、しかし、それは特定の個人の特定の生活であり、要するに語のドラマ的意味での生活である。」(Politzer, G., 1928/2003, p. 51//2002, p. 80)

ここでは、ドラマは具体的個人の具体的生活と同義であるが、これはまだ一般的規定である。ポリツェルは、人間ドラマはいささかも「内面的」ではないという。ドラマは場 lieu を必要とする限りでは、普通の運動や一般的には自然現象と同じように、空間のなかで展開されるが、私が現に存在しているのは、私の生理学的な場や私の生物学的な場であるのみならず、私のドラマ的生活の場でもある。だが、そうした空間は、ドラマ的要素が意味 signification にほかならないのであるから、ドラマに骨組みだけを提供するのである (Politzer, G., 1928/2003, pp. 250-251//2002, p. 280)。そのような意味で、「内面」か「外面」かの二者択一が回避され、具体心理学は人間ドラマにおいて主観の心理学と客観の心理学を真に総合するのである (Politzer, G., 1928/2003, p. 247//2002, pp. 276-277)。そうした意味で、ドラマは行為の意味を中心に具体的な私とその具体的状況、主体-客体を含みこんだ概念となるであろう。

「人間の具体心理学」のなかで、ヴィゴツキーはこうしたドラマ概念をまさしくヴィゴツキー的に解釈している。ここではヴィゴツキーは一方ではドラマを「内面的」に捉え、「人格のダイナミズム」に位置づけ、他方ではドラマをその人の社会的役割と関連づけて捉えている。

「ドラマは現実には次のような種類の諸連関に満ちている：ある人格構造における情念、控え目、嫉妬の役割。マクベスにおいては一つの性格が二つに分解する——フロイト。

ドラマは現実には、身体システムでは不可能な、内的闘争に満ちている：人格のダイナミズムはドラマである。〔中略〕

夢のなかで妻は背信行為をした (オセロ) —— 殺人：悲劇。ドラマはたえず次のような諸連関の闘争である (義務と感情、情念など)。そうでなければドラマ、つまり、システムの衝突はありえない。心理学は『人間化』される。」(Выготский, Л. С., 1929/2003, c. 1030)

「社会的役割 (判事、医師など) は諸機能のヒエラルヒーを規定する：つまり、諸機能は社会生活の様々な領域でヒエラルヒーを変更する。それらの衝突 = ドラマ。」(Выготский, Л. С., 1929/2003, c. 1031)

こうして、妻の犯罪に対する判事の思考・情念の二つのヒエラルヒーとそれらのヒエラルヒーの衝突としてのドラマが生まれるのだが、それは3の図式に示されているとおりである。個人の「内面」にある諸機能のヒエラルヒーは固定的ではなく、具体的状況 (この場合は妻の犯罪を生みだした状況) のなかでヒエラルヒーを構成する諸機能は位置をかえ、異なるヒエラル

ヒーが発生することになり、ときにヒエラルヒー間の衝突が起こる。これが「人間の具体心理学」のなかでヴィゴツキーが理解するドラマなのである。

なおヴィゴツキーは「私の文化的発達史の歴史は、具体心理学の抽象的研究である」（Выготский, Л. С., 1929/2003, c.1030）と述べている。これは自己の理論（この時点での中心は媒介的発達理論）に対する半ば批判的な自己評価である。もちろん彼の理論は「個別的なものは普遍的なものである」という弁証法的思考の故に心理学的実在論とは無縁であるが、まだ具体的生活のなかに具体的個人を捉える理論的枠組をまだ構築していないことの告白といってもよいであろう。

（２）ヒエラルヒー間の衝突という考え方は、より一般的には、心理システム論においても具体化できるものであろう。上述した夢想家、革命家、発明家に代表される思考・情動・想像のそれぞれのヒエラルヒーは具体的個人のなかでときとして衝突する。発明家の心理システムはある種の才能を必要とするとしても、現実的思考のヒエラルヒー（思考-想像-情動）と夢想のヒエラルヒー（想像-情動-思考）の衝突や相互転化は多かれ少なかれ、どの人にもありうることである。たとえば、現実的思考が不徹底であると、そのヒエラルヒーは夢想のヒエラルヒーに転化してしまうのである。

よく知られた事例を一つだけあげておこう。2000年11月、いわゆる「加藤の乱」が起こった。それは、当時の政権の低支持率と国民の不満を背景に野党が提出しようとしていた内閣不信任案に与党内部からかなり多数の支持を寄せて倒閣しようという加藤紘一、山崎拓らの政治行動のことである。結局、与党主流派の多数派工作のなかで加藤が会長を務めていた派閥は分裂し、加藤らは「腰砕け」となり、不信任案に賛成票を投じることなく、50名ほどの志を同じくする者と議場から退場し、不信任案は否決された。この政治ドラマのなかで加藤個人のドラマは二度あったと推測できる。比較的温厚と目される加藤が議会内で決起をしようと思案したとき、現実的思考のヒエラルヒーと夢想のヒエラルヒーが衝突したはずである。そして決起を決意したとき、加藤自身にとっては現実的思考の深化であったはずであったが、実は現実的思考が不徹底なため夢想のヒエラルヒーへと移行し、想像と情動に支配される思考と化したのであった（加藤の乱の敗北後、加藤自身の発言「私は自民党内部での変革を望んでおり、国民は自民党を超えた政界の変革を望んでいた。これが大きな誤算だった」がテレビ放映されている）。これが一度目のドラマである。二度目のドラマは議会での投票当日、すでに自派の分裂が明らかになり、加藤は山崎と二人だけでも反対票を投じようとしたが、同志の説得を受け入れて議場をあとにしたときである。ここで想像と情動の論理に左右された思考、つまり夢想的思考から現実的思考へとヒエラルヒーが転換されている。その過程にも当然、ヒエラルヒー間の衝突があったと推測できる。こうして加藤個人に生じたものは、一度目は夢想的改革者への転化をもたらしたドラマであり、二度目は勇気を失った敗北者としての現実的思考への転化というドラマであった。

この心理システム論はこのように具体的個人、個性をもった人格に接近するうえで有効であると考えられるが、しかし、その有効性はおそらく思春期以降の子どもと大人という範囲に限られるであろう。

(3) より広範囲の具体的個人、個性をもった人格にアプローチしうる、より普遍的な概念は心的体験の概念であろう⁽⁶⁾。同一の環境(たとえば家庭環境)にあっても子どもたちへの環境の影響・役割はその年齢期や個性によって異なってくるという場合に、ヴィゴツキーは心的体験の概念を用いている。まずヴィゴツキーが説明のためにあげている事例を紹介してみよう。

その事例は、飲酒を原因として神経的・心理的変調をきたしているある母親と3人の子どもの家庭についてである。子どもたちはきわめて深刻な状況にあり、母親は酔っ払うと、子どもを窓から突き落とそうとしたり、子どもたちを叩き、床に投げつけたりするのであり、子どもたちは恐ろしい恐怖の状況のなかで生活している。そうした状況において、子どもたちにも発達の変調が現れてくるが、3人それぞれに現れ方の違いがあった。それはそれぞれの子どもの年齢期の違いに起因しつつも、それだけではない。

もっとも幼い第1の子どもには神経症的、防御的な兆候が現れ、恐ろしさに圧倒され、夜尿と吃音がおこり、しばしば声を失っている。いわば打ちひしがれ、無援の状態にあった。第2の子どもは、いわば苦悩の状態にあった。つまり、母親への対立的な感情的態度、アンビヴァレントな態度という内的紛糾が特徴であった。その子にとって、一方では母親は大きな愛着の対象であり、他方ではあらゆる恐怖の源泉であった。第3の子どもは、あまり利口ではなく臆病であったが、それと同時に、早すぎるほどの成熟さ、真面目さ、配慮深さを顕わにした。彼は母親は病気であることを理解し、彼女を哀れんでおり、また、小さい子どもたちが危険な状態にあることも理解していた。彼は家族の皆を配慮しなければならない唯一の人であった。その結果、彼の発達は鋭く変化し、この年齢(10~11歳)にふさわしい生きいきとしたものではなく、生きいきとした興味や能動性をもっていなかったのである(см. на Выготский, Л. С., 1935/2001, с. 73-74)。

ヴィゴツキーはこのような事例を通して、同一の環境が子どもたちに異なる影響を与えており、その相違を心的体験の概念で表そうとしている。状況の影響は「プリズム」を通して屈折しているかのようであり、そのプリズムこそ心的体験なのである。

さらにヴィゴツキーは、『思考と言語』で述べたような研究対象の単位の析出(要素への分解ではなく、その対象の全性質を含んでいる単位)をあげ、心的体験はそのような単位であると考えている。

「心的体験は、一方では、環境つまり心的に体験されるもの——心的体験はたえず人間の外側にあるものに関係する——が分解されない形で表され、他方では、私がこれをいかに心的に体験するかが表される単位である。」(Выготский, Л. С., 1935/2001, с. 75)

「心的体験のなかにたえずあるものは、人格の諸特質と心的体験において現される状況の諸特質との分

かちがたき統一体である。」（Выготский, Л. С., 1935/2001, c. 76）

ここでは、ポリツェルのドラマ概念と類縁的なものが見いだされる。もちろん、私のドラマはどちらかといえば「外面」にあって「内面」と結合されるものであるが、私の心的体験は明らかに「内面」にあってプリズムのように「外面」を吸収するものという両者の違いはある。しかし、どちらも具体的状況のなかの具体的個人、個性をもった人格にアプローチする概念である点は同じである。ただ、ヴィゴツキーの場合、具体的個人とその年齢期に普遍的な特質（狭義の人格）とは無関係なものではなく、「人格の諸特質」のなかにはその年齢期に普遍的なものとその子ども・人間に個性的なものが混ざり合っていると見てよいであろう。

より正確に言えば、「個別的なものは普遍的なものである」という弁証法が一般化の概念によって成立するのと同じように、普遍的なものから個別的なものに至る道も機械的でなく弁証法的なのであって、人間ドラマ、心理システム、心的体験の諸概念を経由しなければならない。これが人格発達の普遍的法則（狭義の人格概念）から具体的個人に至るヴィゴツキー的な道なのである。

こうして私たちはヴィゴツキー理論が社会的実践とどう繋がるかの扉の前にたどりついた。狭義の人格概念が含む人格発達の普遍的法則と具体心理学の方向のなかにあるドラマ、心理システム、心的体験の諸概念とが結合された地点、つまり個性をもった人格概念がその扉である⁽⁷⁾。

この扉の向こう側で待っているのは理論的にはアマルティア・センの capability 概念や池上淳らの人間発達の経済学である。残念ながら紙幅が尽きている。ふたたびポリツェルとヴィゴツキーの具体心理学を再吟味しつつ、機能主義的傾向をもつセンの上記概念や後者に属する二宮厚美の人格・能力二分論を検討することを小論の続編として予告しておきたい。

〔注〕

- (1) ヴィゴツキーは「心理・意識・無意識」（1930年）のなかで「心理的過程」と「心理学的過程」を厳密に区別していることもあり、ここでの「心理システム психологические системы」は直訳どおり「心理学的システム」とすべきかもしれない。しかし、このシステムは個人内部のシステムであり、「心理学的システム」とすると学問体系を連想するのではないかと判断から上記のように訳した。あえて「心理学的」にこだわれば「心理学的なもののシステム」とすることも可能であるが。
- (2) 人格の経済学的あるいは社会科学的規定は「社会的諸関係の総体」の規定によって終わる。しかし、心理学や教育学、社会福祉学にとっては、これは始まりなのであって、「社会的諸関係の総体」が《内へと転移し、人格の諸機能や人格構造の諸形態となる》独自性が追究されねばならない。ヴィゴツキーの場合、その追究は小論の3～6で描いたように行われている。
- (3) 「年齢の問題」はヴィゴツキーが行った講義の速記録をもとに作成されている。ところが、そのテキストは二つあり、ひとつはロシア語版著作集第4巻に収録されているものであり、いまひとつは『児童学講義』（イジェフスク、ウドムール大学出版局、2001年）に収録されている。前者の邦

訳は『新・児童心理学講義』(柴田義松・宮坂瑠子・土井捷三・神谷栄司訳, 新読書社, 2003年)に掲載され, 後者には『ヴィゴツキー学』第7巻(ヴィゴツキー学協会発行, 2006年)所収の伊藤美和子の邦訳がある。二つのテキストの異同は後者が丁寧に指摘しており, テキスト・クリティックが必要である。ひとつ明瞭なことは, 前者のテキストでは「児童学」という用語を含んだ文章が削除されていたり, 「児童学」を別の単語に置き換えたりしていることである(土井捷三と筆者が訳出したヴィゴツキー『「発達」の最近接領域』の理論』三学出版, 2003年のなかで指摘した削除等も同様であった)。

- (4) ヴィゴツキーはアリストテレスが『政治学』のなかで述べた身体という全体と器官や機能という部分の関係を援用して, 次のように述べている。「……すでに検討したどのひとつの機能も——ことばや記憶であれ——いくらかなりとも自立的に, 他の諸機能に依存せずに発達するのではない。心理生活のあらゆる側面は, 密接な影響の過程で, できる限り相互に前進させ支えあいながら, 発達していく。人格は全体として発達するのであり, 条件的にのみ, 科学的分析のためにのみ, 私たちは人格の発達のある側の側面を抽象することができる。……こうして, 有機体的発達〔自然的発達〕の領域でも, アリストテレスの表現によれば, 全体はその諸部分よりも先に存在し, その諸部分そのものとその作用, つまり, 器官と機能は全体の変化に依存して変化する。これとまったく同じように, 何らかの機能の文化的発達の領域におけるもっとも小さな一歩でも, そのきわめて萌芽的な形態であっても, 人格の発達を前提とするのである。」(Выготский, Л. С., 1931/1983, c. 316// 2005, p. 367-377)
- (5) ヴィゴツキーの著作「幼児前期」には3歳の危機にいたるコミュニケーションの変革について次のように述べられている。「一般化が一定の段階に達して, コミュニケーションの古い状況そのものが自己自身を廃棄するとき, まさしくそこにあるのは危機的年齢期である」(Выготский, Л. С., 1932/1984, c. 356// 2002, p. 125)。この点から, コミュニケーションは発達の社会的状況が凝縮されたものと理解することができるであろう。
- (6) ここで心的体験と訳しているロシア語 переживание (ペレヰヴァーニエ) はロシア語固有の名詞であり, ルネ・ヴァン・デル・ヴェールとヤーン・ヴァルシナーはこれを emotional experience と英訳しているが, 彼らによれば, この英語のことば(これは переживание の意味の情動的側面だけを表している)も interaction も переживание の「十分に適切な翻訳ではない」という (Van Der Veer, R., Valsiner, J., 1994, p. 354)。「人格の諸特質」のなかに含まれるものは情動的なものに限らないのであるから, 心的体験または内面的体験がより適切な訳語であろう。
- (7) 教育実践で有効性を発揮しうる「発達」の最近接領域」説も発達と教育の普遍的原理であるとともに, 個々の子どもの発達を診断するという面からすれば, 個性をもった人格概念に参加しうるものであろう。

〔引用文献〕

- Politzer, G. (1928/2003// 2002), *Critique des fondements de la psychologie*, 1928/Ibid, Quadrige, 2003//『精神分析の終焉』寺内礼監修, 富田正二訳, 三和書籍, 2002年
- Van Der Veer, R., Valsiner, J. (1994), *The Vygotsky Reader*, Blackwell, 1994
- Выготский, Л. С. (1925/1987// 1971// 2006), *Психология искусства*, 1925/То же, М., Педагогика, 1987//『芸術心理学』柴田義松・根津真幸訳, 明治図書, 1971//『改訂版・芸術心理学』柴田義松訳, 学文社, 2006
- Выготский, Л. С. (1929/2003), *Конкретная психология человека*, 1929/в кн.: Психология

- развития человека, М., Смысл-Эксмо, 2003
- Выготский, Л. С. (1930/1982), *О психологических системах*, 1930/в кн. : Собрание сочинений, т. 1, М., Педагогика, 1982
- Выготский, Л. С. (1931/1983//2005), *История развития высших психических функций*, 1931/в кн. : Собрание сочинений, т. 3, М., Педагогика, 1983//『文化的－歴史的精神発達の理論』柴田義松監訳, 学文社, 2005年
- Выготский, Л. С. (1932/1984//2002), *Раннее детство*, 1932/в кн. : Собрание сочинений, т. 4, М., Педагогика, 1984//「幼児期」『新・児童心理学講義』柴田義松, 宮坂瑠子, 土井捷三, 神谷栄司訳, 新読書社, 2002年所収
- Выготский, Л. С. (1933/2001//2002//2006), *Проблема возрастной периодизации детского развития, Структура и динамика возраста, Проблема возраста и диагностика развития*, 1933/в кн. : Лекции по педологии, Ижевск, Удмуртский университет, 2001//「年齢の問題」『新・児童心理学講義』柴田義松, 宮坂瑠子, 土井捷三, 神谷栄司訳, 新読書社, 2002年所収//「年齢期の問題」伊藤美和子訳, 『ヴィゴツキー学』第7巻, ヴィゴツキー学協会発行, 2006年所収
- Выготский, Л. С. (1933/1982//1976//2000), *Воображение и его развитие в детском возрасте*, 1933/в кн. : Собрание сочинений, т. 2, М., Педагогика, 1982//『児童心理学講義』柴田義松, 森岡修一訳, 明治図書, 1976年所収//『子どもの心はつくれる』菅田洋一郎監訳, 広瀬信雄訳, 新読書社, 2000年所収
- Выготский, Л. С. (1935/2001), *Основы педологии*, 1935/в кн. : Лекции по педологии, Ижевск, Удмуртский университет, 2001

(かみや えいじ 社会福祉学科)

2006年10月19日受理